

アジア諸国と人権 (その三九)



研究センター所長
京都大学名誉教授

安藤 仁介

ヴェトナムに続いて、インドシナの他の二国、ラオスとカンボディアの人権状況を概観してみましよう。

まず、ラオスはインドシナ半島の中央に位置する内陸国で、国境はそれぞれ、北に中国、西にビルマとメコン河沿いにタイ、東にヴェトナム、南にカンボディアと接しています。国土の大半は北部から中部に広がる山岳と高原で、しかもメコン河畔に点在するいくつかの集落は同河へそそぐ急流で分断されているため相互の交通は困難であり、各集落は孤立割拠状態です。農耕地は全土の四%しかなく、ここでは米が輸出できるほど獲れますが、地形のせいで国内における流通は

限られています。なお、首都ヴィエンチャンの北方ダム・ダムの水力発電所からタイへ輸出される電力は、ラオスの有力な収入源となっていますが、ラオスはいわゆる最貧国の一つで、一人当たり年間国民所得は一二〜一三万円にすぎません。ついでながら、ラオスの国土は二四万平方キロと、日本の六割強です。

ラオスの総人口は六八〇万足らず、このうち八〇万は首都ヴィエンチャンに集まり、あとはせいぜい数万ばかりで、旧首都のルアン・プラバンも二五万にすぎません。種族的には、タイ系の低地ラオ族が全人口の三分の二を占め、ほとんどが小乗仏教の信者です。他には、ビルマ東北部、タイ北部、中国南部に広がるモン・クメール系や一八世紀後期に中国から来たとされるミャオ族、ヤオ族と呼ばれる種族がいます。そして、ラオ族を含む山岳・高原地帯の居住民は無数の少数民族グループに分かれて独自の文化と言語を持つ自律的な生活を営んでおり、まさに民族のるつぼ的な状況で、中には自然崇拜や祖先崇拜を奉じるものもあります。また都市部には、約一〇万の華僑と三万のヴェトナム人が住ん

でおり、大乗仏教やキリスト教の信者もいます。

ラオスの歴史を見ると、だいたい八世紀ころタイ系の人びとが現代の中国南部から移住を始め、次第に先住民に代わっていきました。一二〜一三世紀にはルアン・プラバンに人が集結し、一三三三年に最初のラオ政権が樹立されてランサン王国を名乗りタイ東北部まで支配を広げチェンマイを服属させましたが、一六世紀半ばにはビルマに攻められて首都をヴィエンチャンに移しました。この間一六四一年には、オランダ商人が交易のため渡来し、ラオスをはじめ西欧世界に紹介されたといわれます。しかし一八世紀には王位継承をめぐる内紛からランサン王国は三王国に分裂し、隣国のビルマ、シヤム(タイ)、ヴェトナムに国土を侵食されたほか、後半にはシヤムの属国となり、また一九世紀にはヴェトナムが北部領土の一部を編入しました。

一九世紀後半に入ると、フランスがインドシナに進出し、ヴェトナム、カンボディアに続いてラオスにも手を伸ばしました。とくにフランスはタイに圧力をかけてルアン・プラバンに副領事を置くことを認めさせ、

一八九三年にはメコン河以東の土地をフランス保護領と認めさせました。そして、ヴェトナムに関する説明で触れた通り、フランスは二〇世紀前半にはインドシナ三国を支配下に入れたのです。しかし、第二次大戦期にフランスは日本の軍事進出の前にラオス王国の独立を認めたものの、一九四五年の日本の敗戦後ふたたびラオスに介入し、四九年にはフランス連合内の協同国たる地位を与え、五三年になってやっと独立を認めました。

他方、日本の敗戦直後に結成された「自由ラオス」は、タイに逃れて亡命政府を組織し、五六年には「パテト・ラオ(ラオス愛国戦線)」を結成して、ラオス北部に解放区を設定しました。そうして、米国の支援を受けた王国政府の支配が形骸化するなか、ラオス国内の右派とパテト・ラオの間で妥協と戦闘が繰り返されますが、七五年春以降のカンボディア、ヴェトナムにおける解放勢力の攻勢とブノンペン、サイゴンの陥落はパテト・ラオを勇気づけ、同年一二月その首導下にラオス人民共和国が誕生したのです。